



特集

人と地球のいい関係

[歴史の教訓]

法政大学教授・
都市プランナー

田村 明

リサイクル都市。 江戸

環境汚染に悩む現代の都市

現代都市はどここの国でも環境問題に悩んでいる。大気汚染、水質汚濁がその典型だが、交通渋滞、騒音・振動、緑の不足、ごみ処理問題、有害物質の発生、さらには熱帯雨林の消滅、熱汚染やフロンガスによるオゾン層の破壊などの地球規模の環境破壊も問題になっている。その原因の多くは大都市にある。

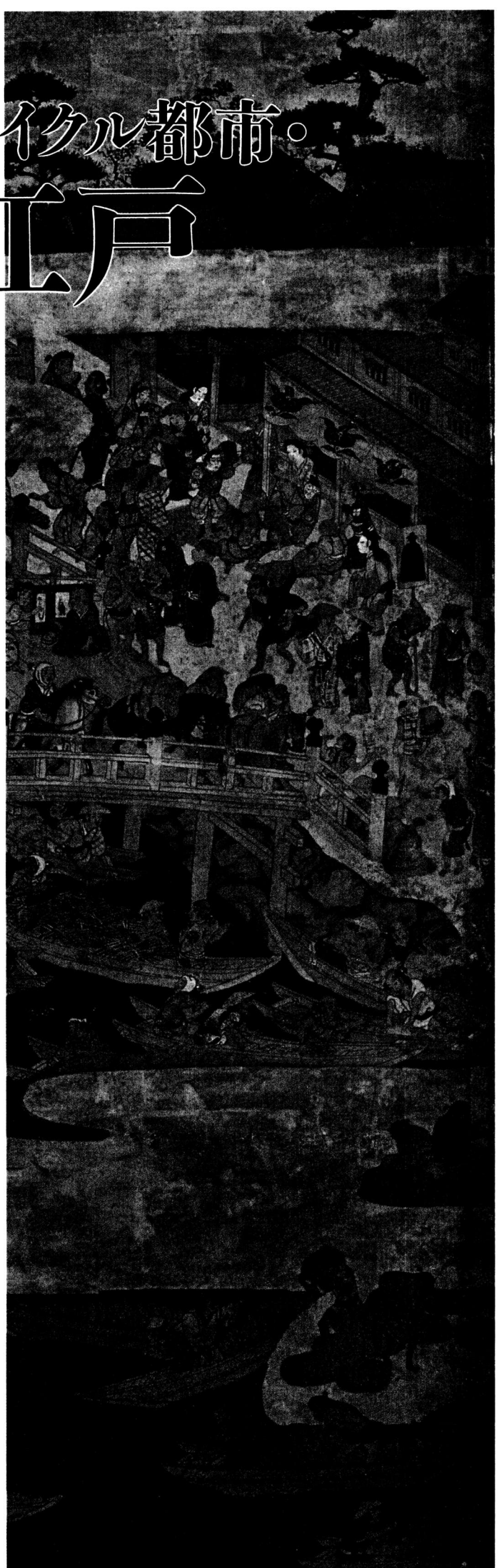
都市の時代に突入した現代、都市生活は避けられない。大都市に必然的に発生する環境問題に正面から取り組む必要がある。解決手法は外国に学ぶだけでなく、日本の都市の歴史のなかにも隠されている。その意味で、江戸の環境問題を考えるのは、過去の話と言うだけではなく、未来への答えを探るヒントになるだろう。

18世紀なかば、江戸はすでに100万人を超え、当時の世界最大の都市になっていたが、環境問題はほとんど起きていない。これに対して産業革命の波のなかに、ロンドンには19世紀初頭頃に100万都市に達するが、こちらのほうは環境汚染の典型のように、汚れた臭いのする川や真っ黒な煤煙のなかで暮らしていた。有名なロンドンの霧も、ロマンチックなイメージとはほど遠く、実態は石炭の粉塵を核にした黒い霧で、第二次大戦後になってからでさえ、3,000人の人命を奪うほど健康を蝕むものだった。近年ようやく石炭を焚くことを禁止し、ロンドンの霧もめっきり少なくなったという。

環境を維持させた江戸のシステムと市民意識

ところがロンドンを上回る大都市であった江戸が、それと対照的にほとんど環境汚染がなかったのは驚くべきことである。江戸が産業革命期のイギリスの都市のように工業都市ではなかったためであるが、それにしても当時世界一であった100万都市を環境汚染のない清潔な都市にしていたのは、それなりのシステムや市民意識があったからで、明治の初めまで続いていた。明治11年に来日したイギリスの女性旅行家、イザベラ・バードは従者一人をつれて、北海道まで日本の奥地を旅行する。日本の町が塵ひとつ落ちていないほど清潔に保たれていたことを記し「このことを故郷エディンバラの市役所の人々に教えてやりたい。そうすれば随分いい教訓になるだろう」と言っている。エディンバラは結構美しい町だが、日本の町はそれをはるかに上回るほど整って清潔な町だった。

江戸の町の空気は清浄で、今よりも富士山がずっとよく見え、東北には筑波山も見えていた。有名な北斎の『富嶽三十六景』には、江戸の町から富士を望む構図が多いのも、見えるのが普通だった証拠だろう。春になると隅田川の出口にある佃島あたりで、透き通った新鮮な白魚を取って毎年将軍家に献上していた。もちろん臭いなどはない。



たむら あきら 1926年東京都生まれ。東京大学工学部、同法学部卒業。運輸省、日本生命、環境開発センターを経て、69～81年まで横浜市企画調整部長、同局長、横浜市技監を歴任する。現在、法政大学法学部教授。主著に「都市を計画する」「環境計画論」「江戸東京まちづくり物語」などがある。

江戸の町の環境がこのように汚染されていなかった最大の理由は、すべてのもののリサイクルシステムができあがっており、自然のなかで生まれるエネルギーだけに頼って、自然サイクル以外からエネルギーをもち込まなかったからである。また、市民が町の掃除を清潔に行ない、リサイクルはあたり前だという意識をもっていた。

リサイクルの最もたるものはし尿である。それは無用な廃棄物どころか、貴重な肥料として、農民たちが争って回収していた。大きな大名屋敷のし尿を汲むのは大変な権利だったし、長屋の共同便所を汲み取らせるだけで、大家には相当な収入があった。当時のヨーロッパの都市の多くが、し尿を街路に撒き散らして大変に臭かったのとは大違いである。

すべてのものは徹底的に修理して使われ、不要になったものも古物商の手を経て再び有効に利用している。使われなくなった着物は古着屋に売られたが、相当な家でも古着を買うのは別に恥ずかしいことではない。紙も貴重品だったから浅草紙として再生された。すべてのものは社会のなかで最後まで利用するシステムと意識があり「もったいない」という言葉はあっても「消費は美德」というコマースャリズムの宣伝はなかった。

閉鎖系に暮らすための教訓と知恵

エネルギーも地中から掘り出した化石燃料には頼らず、人力や牛馬の力が主だし、もともと太陽と葉緑素の力で自然のサイクルのなかで生まれた薪や木炭などを使い、使用後は、また自然のなかに循環していった。鎖国の日本では外国から石油を買い、その結果大気汚染を招いている現在とは違い、自然の物質環境のなかで生活していた。余計なエネルギーを使わなくても、けっこう質の高い文化を生み出し、それなりに豊かな遊びもある社会をつくりだしている。教育水準の裾野の広がりも世界のトップレベルであった。

もちろん現在と江戸時代では状況は違うし、手放していいことばかりではない。度々の大火にもかかわらず、江戸城を守ることに重点を置き、防火都市の建設はほとんど行なわれていない。また大名屋敷などのなかに庭園はあっても、庶民の利用できる公園・緑地は乏しい。だからそのまま時代を戻す必要はないが、資源のない日本が鎖国という閉鎖系のなかで、うまく物質やエネルギーを循環させ、環境汚染もおこさず文化度を高めたシステムや考え方は大いに参考にしていい。

ところが現代は丁度これと逆の大量消費・大量廃棄そして環境負荷の増大と汚染を許すシステムや意識をつくりあげた。それが人間の生活から真の豊かさを失わせ、余裕のないものになっている。江戸の知恵と手法は日本への参考になるだけではない。地球という閉鎖系のなかで暮らす宿命にある人類にたいしても、教訓と知恵を提供できるかもしれない。

日本橋周辺。『江戸名所図屏風』（出光美術館蔵）より

SANKI ENGINEERING MAGAZINE

Harmony

[ハーモニー]

1993 WINTER

特集
人と地球のいい関係

神奈川県立
'93. 1. 23
川崎図書館